P2-029

社会福祉士および介護福祉士法改正が特別支援学校における医療的ケアに対して及ぼした影響について
ー教職員・保護者・看護師の視点からー

三原 俊、中塚 志麻、高田 哲
神戸大学大学院保健学研究科

【目的】
社会福祉士および介護福祉士法の一部改正によって、教育委員会自身が登録研修機関となり、学校を登録事業所、教職員を特定行為業務従事者と位置づける自治体も増加してきた。教育委員会が登録研修機関となっているA市において、支援学校に勤務する教職員・保護者・看護師を対象にインタビュー調査を行い、特別支援学校の医療的ケアが法改正前後でどのように変化したかを聞き取った。
【方法】
A市の特別支援学校に勤務し、医療的ケアに関わってきた教職員8名、医療的ケアを受けている子どもの保護者3名、看護師・養護教諭3名の計14名に対して、30－60分の半構造化インタビューを実施した。インタビュー内容をICレコーダで記録して逐語録を作成した。その後、作成した逐語録を基に、教職員・保護者・看護師ごとからのインタビュー内容をコード化し(教員1,474コード、保護者522コード、看護師418コード)、質的記述的分析方法に基づいて、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した(サブカテゴリー：教員23、保護者17、看護師20、カテゴリー：教員7、保護者3、看護師4)。各々の立場からの意見を集約するとともに、相互の関係性を検討してみた。研究の実施に際しては、神戸大学大学院保健学研究科倫理委員会の承認と教育委員会、保護者の了承を得た。
【結果】
1)教職員は、法改正に対して肯定的に評価していた。「登録特定行為業務従事者」として医療的ケアに従事するようになり、医療的ケアを安定的に実施できており、法改正に伴う大きな影響は感じていなかった。
2)保護者も、法改正後の指導看護師による実地研修を肯定的に評価しており、法改正に伴う大きな混乱や変化は感じていなかった。一方、通学時の乗り物内での医療的ケアや学外行事での対応などの課題が存在することも明らかとなった。
3)看護師は、研修制度の利点は認めるものの、指導看護師として研修制度の実施に大きな負担を強いられることが多く、看護職員の増員や責任に応じた待遇改善を要望していた。
【考察】
医療的ケアに関わる教職員と保護者は、法改正に伴う新しい研修制度を肯定的に評価をしていた。この結果は、法改正以前よりA市では、職員が医療的ケアに参加していたこととも関連すると思われた。一方、学校において新たな研修制度を立ち上げなければならなかった看護師の重圧と負担は大きく、看護師への研修システムの確立や待遇改善を要望していた。

P2-030

養護教諭に対する起立性調節障害(OD)の研修効果

三上 眞美[1]、古川 恵美[2]、石﨑 優子[3]、藤原 彩子[4]
[1]大阪市立平野南小学校、
[2]畿央大学 教育学部、
[3]関西医科大学 小児科講座、
[4]株式会社メディコン

【目的】
起立性調節障害(以下、ODと記す)は、症状によって長期欠席や、二次性の不登校状態をひき起こすことが少なくない。午前中は調子が悪く、午後に症状が改善する場合が多いために周囲の理解が得られず、家族や学校関係者との信頼関係が悪化することもある。今回、養護教諭の自主学習会でODについての研修を行い、その研修効果について調査した。
【研究方法】
2017年2月、自主学習会に参加した小・中学校に勤務する養護教諭14人を対象に質問紙調査を実施した。研究目的と方法、倫理的配慮の内容を説明し、小児科医の講演のあとに記入して学習会終了後に回収した。調査票の提出をもって本研究に同意が得られたものとした。校種、経験年数、疾患への理解、勤務校での取り組み、血圧計の活用、今後学習したいこと等を回答してもらった。
【結果および考察】
経験年数は10年以下が8人(57.1％)、11～20年目2人(14.3％)、21～30年目3人(21.4％)、30年以上は1人(7.1％)と最も多かった。ODについて「知っている」12人(85.7％)、「聞いたことはあるが詳しく知らない」2人(14.3％)で、主に研修会や教職員間の情報交換で知識を得ていた。今年度、ODと診断された児童・生徒が在籍していると回答した者は、10人(71.4％)であり、小学校3人、中学校7人だった。担任や保護者との面談はしているが、主治医との面談はほとんど行われていなかった。治療方法を「知っている」と回答した者は7人(50.0％)、「聞いたことはあるが詳しく知らない」が6人(42.9％)で、今後学習したいこと(複数回答可)は、「学校での望ましい対応について」8人(57.1％)、「学校と病院との連携について」7人(50.0％)、「不登校の対応」5人(35.7％)、「経過・予後について」5人(35.7％)であった。学習会後に保健室に血圧計の有無を確認したところ、14校中13校で、「使わない」1人、「ほとんど使わない」7人、「時々使う」4人、「活用している」は1人だった。デジタル血圧計9校、手首用血圧計3校、水銀血圧計5校(複数回答あり)で、小児用マンシェットがある学校は1校だった。学習会後、OD症状のある児童・生徒は、乗り物酔いがひどい、手足が冷たく、霜やけになりやすい等の具体的な症状などを知ることで、思い当たる児童・生徒に気付くことができていた。今後、各校の事例を持ち寄るなど、継続して研修の機会を設けていくことが有益だと感じた。

Presented by Medical*Online